

本当に怖いのは、偏見や差別。 H I V / A I D S の “今” を知る。

なにげない一言

K T

和菓子を食べていた時のこと。

「甘いなあ、お前にやるよ。俺はA I D Sじゃないから大丈夫だよ」

そんなことではうつらないのに。……H I Vは血液、精液、膣分泌物から感染するのであって、肌が触れあったり、同じ食べ物を食べたりしてうつるものではありません。

私は感染経路の知識がありながらも、ひとごとの様な気がして彼との行為でコンドームを使わずに感染したのですが、これは人を愛して愛される限り、誰がかかってもおかしくない病気なのです。

考えてみてください。もしあなたの職場の女子事務員が私だったとしたら、あなたはどのような態度をとりますか？

(シンポジウム「エイズと職場」資料より)

H I V / A I D S はいま

1981年、アメリカのロサンゼルスで原因不明の「死の病」が発見された。

全身の倦怠や体重の急激な減少が続き、やがて免疫力が低下して、普段はかからないような病気によって死に至る……A I D S (エイズ=後天性免疫不全症候群)である(注)。

当初、A I D Sは原因や感染経路が不明だったこともあり、A I D Sパニックともいうべき現象も起きた。

やがて、A I D Sは急激に全世界に蔓延をはじめた。2012年末現在、H I Vウイルス陽性者・A I D S患者は世界中で3500万人にも及ぶ。

日本でも1985年、最初の感染者が発見される。当初はその大半が血液凝固因子製剤による感染例(薬害エイズ)だったが、いまではA I D Sは年齢や性別を問わず、あらゆる人々の間で拡大を続けている。

A I D Sは今では、その原因が血液などを媒介したH I Vウイルスであることがわかり、対策も治療法も飛躍的に進歩している。感染力も弱く、決して隔離を必要とする伝染病などではない。

だが、かつて刻印されたA I D Sのイメージは、今でも私たちの中に残っているのかもしれない。

そして、そのためにH I V陽性者やA I D S患者が差別されたり、偏見によって予防や治療が妨げられているとしたら……私たちはH I V / A I D Sの“今”を、正しく理解する必要があるのではないだろうか。

(注) H I Vウイルスに感染してもすぐに症状が出るわけではない。一定の症状があらわれた状態がA I D Sである。

H I V / A I D S への誤解

さて、つぎの設問は正しいだろうか？

- ① H I Vウイルスの感染力は非常に強く、患者は厳密に隔離されなければならない。
- ② H I V / A I D Sの治療法はみつかっておらず、感染すればただちに死につながる。
- ③ H I V / A I D Sは解雇の理由となる。
- ④ H I V陽性者・エイズ患者数は、日本では減少しつつある。

答えは、いずれもNOだ。

- ① H I Vウイルスの感染力はきわめて弱く、周囲にH I Vのキャリアがいても、一般的な生活を送っている限りまず感染することはない。
- ② H I V / A I D Sの治療法は飛躍的に進歩しており、完治はできないまでも、早期に治療を始めれば発症はほとんど押さえられるようになった。キャリアは定期的な通院と服薬を続ければ、十分に長期間の社会生活を営める。
- ③ 解雇の理由にはならない。

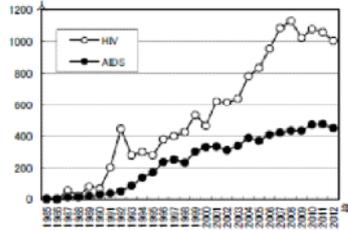
厚生労働省も「職場におけるエイズ問題に関するガイドライン」で、「エイズを理由に差別したり解雇したりすることがあってはならない」としている。

H I V / A I D S の予防のために

ただ、問題は④だ。

多くの先進国でH I V感染者は減少しつつあるにもかかわらず、日本だけは感染者が増加を続けているのだ。それはなぜだろう。

その理由のひとつは、いまだにH I V / A I D Sに対する偏見が残る一方、積極的な予防や検査が遅れていることかもしれない。



▲日本のH I V / A I D S患者数

日本のH I V陽性者・A I D S患者数は2012年末までの累積で21,425人。

その多くは20代から40代の成人で、感染理由の9割は性行為による感染だ。逆にいえば、「避妊具などで予防できたのに感染した」例も多いということだ。

「A I D Sに対する最良のワクチンは教育である」という。特に若者の感染を防ぐには、A I D Sや避妊具の使用についての教育が重要になる。

しかし、日本ではかつて性教育に対する政治的なバッシングが起きたこともあり、学校現場でのとりくみはいまだに萎縮しがちだ。

だが、H I V / A I D Sの抑制に成功した先進国は、いずれも性の問題をタブーとせずH I V / A I D Sについての啓発や性教育を進めた国である。性教育やH I V / A I D S教育をタブー視することなく、積極的に進めなければならない。

早期発見・早期治療のために

H I V感染を早期に発見するためには検査が重要だ。だが、無理解はこんなことも引き起こす。

この11月、H I V陽性者の男性が献血した血液が輸血に使われ、輸血を受けた患者がH I Vに感染したことがわかった。

この男性は、H I V検査を目的に献血を行ったとみられる。だが、献血をしてもH I V検査の結果は知らされない。こんな行為はあってはならない。

H I V / A I D Sの検査なら、全国の保健所で匿名で、しかも無料で受けられることをこの男性は知らなかったのだろうか。

藤沢保健所の場合、検査は毎月第1～第4木曜日の午前9時から10時50分の間。最近は夜間検査も始まった。保健所の保健予防課(0466-50-3593)に電話すれば、予約ができる。

検査は来訪者が顔をあわせることのないよう時間を空けて行われ、約40分後には結果が知らされる。

H I V / A I D Sは「特別な一部の人だけがかかる病気」という誤解もあるかもしれない。だが冒頭に紹介したように、H I V / A I D Sは「誰がかかってもおかしくない」病気なのである。

だからこそ、早期の検査によって早期の治療につなげることが、感染の拡大を防ぐ大切な課題なのだ。

「治療を受けながら働ける」職場環境を

H I V / A I D Sは20代から40代にもっとも広がっている。つまり、その多くは仕事を持ち、働いている人たちだということだ。厚労省の調査ではH I V陽性者の73%が就労しているという。

では、もし職場の同僚がH I V陽性者であることがわかったら、私たちはどうするだろう。

2012年の12月、日本労働組合総連合会(連合)は、「H I V / エイズと職場 ～労組の役割・求められるリアリティ～」というシンポジウムを開いた。この中で連合は、

H I V陽性でも治療により健康を維持しながら働き続けることができるようになっていますが、職場で陽性者であることを伏せているため、必要な配慮を求めることができず働きづらくなったり逆に陽性であることを明かしたために差別を受け退職に追い込まれるといった問題が少なくありません。

と報告し、その上で、「H I V / A I D Sに対する理解を深め、感染予防と差別のない事業場を作ること」を訴えた。

企業の側でも、外資系を中心にH I V陽性者やA I D S患者が「治療を受けながら働き続けられる」よう配慮する企業も増えている。企業の人事担当者に対する啓発も進みつつある。

H I V / A I D Sだけではない。何らかの病気や困難を抱える人にとって働きやすい職場は、誰もが働きやすい職場であるはずだ。

私たちはかつて、ハンセン病に対する無理解と偏見から強制隔離など多大な人権侵害を引き起こした。同じ過ちを繰り返してはならない。

H I V / A I D Sは決して「恐ろしい病気」ではない。本当に「恐ろしい」のは、無理解による差別と偏見だ。藤沢市での啓発も、さらに進めていかなければならないだろう。



エイズの啓発リボン